感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 46 号

「もうたくさんだ　～ 神の国はすぐそこに来ている ～」



日本聖公会婦人会
担当主教
大阪教区主教
バルナバ　小林　聡

我慢することに疲れてしまって、我慢すること自体に我慢できなくなってしまった。そんな叫びが方々から聞こえてきます。それは日常の中にある暴力に疲れ果てた者の叫びです。

今年の 8・15 平和メッセージ（日本聖公会首座主教、正義と平和委員会委員長）の言葉の中に、「人間の忍耐を超えた地獄」という言葉がありました。世界中で起こっている暴力や殺戮、差別をこのように表現しているのです。

アメリカの黒人差別に抗う公民権運動の中で、ローザ・パークスという女性が、バスの中で白人に席を譲らなかったという罪で捕らえられた事件がありました。1955 年当時アメリカにはジム・クロウ法という法律があり、黒人は白人に席を譲らなければならないという差別法があったのです。ローザさんは逮捕されましたが、1992 年に出版された自伝の中でローザさんは、席を譲らなかった理由を次の言葉で語りました。「The only tired I was, was tired of giving in.」 この言葉を訳すと、「わたしはただ疲れてしまったの。服従し続けることに。」となるのでしょうが、黒人として差別されてきた人にとってこの言葉は心の底から「もうたくさんだ」という叫び、忍耐の限界を超えたうめきであったのだろうと思います。「人間の忍耐を超えた地獄」も、もううんざりだ、といううめきのように私には聞こえてきます。暴力、不平等、抑圧、蔑み、差別。被害を受ける人も、加害者も、加害に加えられることも、もううんざりだ、とこの世界中の多くの人が思っているのではないでしょうか。

大阪教区主教邸の近くの墓地には、虐待され、服従させられ続けてきた女性や子どもたちの解放のために働いた伝道師林歌子の墓碑があります。そこには地球儀が据えられており、その地球儀には世界平和の祈りが刻まれています。女性や子どもたちが現代世界でも奴隷とされ、日本でも人身売買などの犠牲となっている多くの人々がいます。林歌子がローザ・パークスの言葉を借りて叫んでいます。「もうたくさんだ」と。この叫びは神の叫びです。「イエスは大声を放ってから、息をひき取った」（マルコによる福音書 15 章 37 節）。イエスの叫びでもあります。私たちひとり一人の「もうたくさんだ」の声が、さざなみとなって、この世界を神の平和の世界へと作り変えていけますように。

2026 年度お献げ先

RITA－Congo（リタコンゴ）

コンゴ東部の町ブカブで、パンジ病院を運営している産婦人科医のデニ・ムクウェゲ医師のもとには、性的暴力で重症を負った女性や子どもたちが多く運ばれてきます。被害に遭った人は 40 万人。その原因が、コンゴ東部にある鉱物資源をねらって侵入した武装勢力によるものです。鉱物資源が武装勢力の資金源になることを防ぎ、女性たちが安心して働き、子どもたちが、児童労働から解放されて学校教育を受けられるようにするために、「紛争の武器として性暴力を使うことを終わらせよう」と世界に向けて呼びかけました。

米川正子氏と華井和代氏の二人の日本人女性は 2019 年 NPO 法人 RITA－Congo（リタコンゴ）を立ち上げ、ムクウェゲ氏の社会啓発活動を支援しています。「RITA」は日本語の「利他」で、他人のことを自分の事のように考えること、そして遠くで起きていることに共感を持ち、他者のために行動することです。便利で快適な生活を追い求める私たち先進国の豊かな暮らしとも深く関係しています。

デニ・ムクウェゲ医師は 2018 年ノーベル平和賞授賞式のスピーチで次のように語りました。「私はこの星で最も豊かな国のひとつから来ました。しかし、私の国の人々は世界で最も貧しいのです。金、コルタン、コバルトなど、有り余るほどの天然資源が、戦争や過激な暴力、絶望的な貧困の原因だという事実です。略奪の結果として、極度の貧困により罪のない男性や女性、子どもたちが数百万人もいるのです。その一方で、私たちの鉱物から得られた利益は、一握りの貪欲な指導者たちのポケットに入ってしまいます。これまでの 20 年間、私がパンジ病院で見てきたものは、機能不全に陥った国家が招いた悲惨な結末です。」

サイディア・フラハ

ケニアのキテンゲラ市にある NGO 団体「サイディア・フラハ」は、1992 年、荒川さんと 2 人のケニア人との出会いから始まりました。活動の中心は「スラムの子どもと女性のためのプロジェクト」。1993 年にはキテンゲラ市に土地を購入し、地域の子どもたちのための幼稚園と児童養護施設を開設。ケニアでは今でも、男尊女卑の傾向が強く、男子に比べて女子は親の期待度が低く、育児放棄されることが多いということからです。

ケニアの貧しい家庭の子どもたちにとって、自立してサイディア・フラハで生きていくことは、何よりも大切な事です。成人男性も、「職業に就く」ことは難しいのがケニアの現実です。今年、高校を卒業する 3 名は、将来自立のために職業訓練校に半年通う予定ですが、その費用が必要となります。ケニアでは公立高校の授業料は無料ですが、制服代、文房具代、昼食代が必要です。サイディア・フラハの子どもたちが、日本からのボランティアの方々や支援する人々との出会いによって、自分を大切な存在だと感じて成長してくれることを期待します。

アトゥトゥミャンマー

現地と連絡を取りながら、支援活動を行う「アトゥトゥ（ともに）ミャンマー」

ミャンマーの軍事クーデターから 5 年。昨年末に行われた総選挙で、国軍の司令官が大統領に選ばれました。ミャンマーは 7 割を占める多数派のビルマ人と 135 の少数民族による国であり、多くの言葉や文化の豊かさと難しさを抱えている国。空爆から逃れるため、国内避難民となっている人々の数は 300 万人（2025 年）。若者は徴兵制を逃れて国外へ出国し、日本にも多くのミャンマーの若者が語学留学や技能実習生として滞在しています。

アトゥトゥミャンマーが支援している人々は、キリスト教会のネットワークを通じて繋がっている人々が多く、「アトゥトゥランチ」は 2025 年 3 月ミャンマー大地震の被災者の生活支援と心身の健康相談や避難生活を余儀なくされている人々の子どもたちへの給食支援をしています。また、病院に行くことが困難な人々の健康相談活動では、女性たちが安心してお産をすることができる支援も行われています。

ELCC　国際子ども学校

1998 年、公教育を受けられないフィリピンにルーツを持つ子どもたちのために、名古屋学生青年センターによって設立されました。設立当初は、学齢期になっても日本の小・中学校に通えない子どもたちがほとんどでしたが、現在は、行政への働きかけにより地域の小・中学校に通う道が開かれています。しかし、来日して間もないことによる日本語力の不足や文化の違い、行政担当者の理解不足など、様々な理由で日本の学校に通うことを諦める子どもたち、また学校に在籍はできても学校生活に馴染めず、不登校や中退のリスクを抱える子どもたちは、今なお存在しています。

開校以来、ELCC では延べ 400 人以上の子どもたちを受け入れ、子どもたちが安心して過ごせる「居場所」と可能性を広げる「学びの場」を提供してきました。2026 年 3 月名古屋学生青年センターの活動終了に伴い、その長年の歩みと理念を引き継ぎ、さらに発展させるため「一般社団法人国際子ども学校」を設立し、場所を変えることなく活動を継続しています。平日の月曜日から金曜日まで、日本語や算数といった学習支援のみならず、音楽や図工など豊かな感性を育む授業を行うと同時に、フィリピン人としてのアイデンティティを育むため、母国の言葉や文化を伝える時間も大切にしています。

地域支援団体　釜石支援センター望

代表の海老原祐治さんは 2011 年の東日本大震災の 6 月に釜石に行き、聖公会の「いっしょに歩こう！プロジェクト」で 2 年間の働きの後、住民がお互いに支え合う共助を目的とした「釜石支援センター望」を立ち上げました。大震災から 15 年を経て、復興は終わることはありませんが、今なお住民に寄り添い続けておられます。

海老原祐治さんの報告「釜石支援センター望の現状とこれから」（2026 年 4 月 23 日付）から抜粋。「東日本大震災が発生した 2011 年から活動を始め 15 年が経過しました。活動開始時に 60 歳だった人が 75 歳の後期高齢者になってしまう年月です。《釜石支援センター望》の活動を支えてきた人材も高齢化が進み、これまで通りの活動がままならない現状にあります。長年ストレッチ体操を指導してきた先生が病気療養で活動できなくなり、手芸や調理系プログラムを担っていたスタッフも週 3〜4 回のサロン実施が週 1 回の実施になっています。体調等の問題なので無理をさせることはできず、サロンの実施に影響が出ています。また最盛期には月平均 2 組は来ていた県外ボランティアも現在では 2〜3 か月で 1 組程度の活動に減少しています。さらにはコロナ禍で活動できなかった影響で休眠状態になってしまった地元グループなども複数あり、音楽系プログラムなども実

施できない状態が続いています。釜石で支援を続けているのは『釜石支援センター望』だけになりました。これからも期待やニーズに応えていけたらと望んでいます。」

野宿者自立支援「夜回りチーム結」

阪神淡路大震災（1995 年）後、神戸のまちで野宿を余儀なくされていた沖縄出身の方々が沖縄へ帰られました。しかしながら、住むところもなく、差別の中で生きていました。行き場のない方々を、野宿者自立支援「夜回りチーム結」が支え、24 年目の年を迎えました。毎週木曜日、おにぎり、ゆで卵、カップラーメンとお湯を携え、野宿している方々を訪ねています。高齢な方、病弱な方、孤立した方、身寄りのない方、30 人をお訪ねして、命を支え福音を届ける活動をしています。

「夜回りよ、今は夜のなんどきですか」　夜回りは、言う、「朝がきます」

（イザヤ書　21：11－12）

感謝箱献金事務局（コア）から

ご挨拶

ハンナ 井上恵美子（大阪教区）

６月から感謝箱献金のお仕事を担うことになりました。

感謝箱献金は 2007 年、２年間の協議を経てコアと名付けられ、新たなスタートを切りました。その年に私は役員会よりコア担当として参加していました。献金箱が新しく作られ、図柄は空と虹で美しく、リボンの付いた祈りの栞も配られました。

私が子どものころに見覚えのある箱はもっと小さくて地味な感じだったと思います。台所の棚の端っこに置いてあって、貯金箱にしては紙で作られて、何だろうと思っていました。裕福ではない我が家でしたが、母は覚えていて何かある度にチャリンと献金していたのかなと、今は想います。

130 年に渡る活動に、再び、今度は運営委員長として携わることができ感謝です。

感謝箱献金事務局（コア）運営委員

チャプレン　司祭 義平雅夫　　委員長　井上恵美子

コアスタッフ　諸岡千佐子　　コアスタッフ　植原久美子

編集後記

なんと災害の多い年でしょうか。国内、国外問わず、思いを言葉に出来ません。秋めいて木の実がなり、木の葉が色づき、秋桜を月を愛でて、このような何気ない日常が一日も早く訪れるようにお祈り申し上げます。（井上）



日本聖公会婦人会
感謝箱献金事務局（コア）

〒545-0053
大阪市阿倍野区松崎町 2-1-8
日本聖公会大阪教区事務所内
E-mail: kansya.osaka@gmail.com
TEL：06-6621-2179/FAX：06-6621-3097